

中国貨幣の歴史

16 隋の銭貨統一



おきがた
開皇五銖 (置様五銖)

隋・文帝が開皇元年（581年）に鑄造を開始した五銖銭。「北周」の高い鑄造技術をもとに、精巧に作られている。



はくせん
白錢五銖

銅に錫鑛を混ぜて鑄造されたため白味を帯びており、白錢五銖と呼ばれる。



小五銖

隋の「五銖」銭の中でも、白錢五銖よりやや小型のもの。

隋の「五銖」銭

分裂時代に入った後漢以来約400年ぶりに中国を統一した隋では、新たな「五銖」銭を鑄造・流通させる。悪銭や旧銭の取り締まり・没収と鑄銭所造営による新銭供給により、後漢末以降に流通の主体となってきた悪銭などの回収が進み、新たな「五銖」銭による流通銭貨の統一が進展する。

隋の「五銖」銭は、外郭の幅がかなり広く、一見して従来の「五銖」銭と異なることがわかる。表面の方孔右側の縦線が凸起している点も特徴。

華北を統一した「北周」王朝の外戚にあたる楊堅（後の文帝）は、帝位を奪って「隋」（581～618年）を建て、589年には南朝の「陳」を滅ぼし、分裂時代に入った後漢末以来約400年ぶりに中国を統一する。

隋の文帝（在位581～604年）は、対外的には、国富の濫用を戒めて無用の国外出兵を避け、北方の突厥など周辺国を策略で弱体化させる政策をとる。一方、内政面では、583（開皇3）年に秦漢以来の諸律令を集大成した「開皇律令」を定める。また、唐の三省・六部制の原型とされる中央官制を整備し、地方制度も魏晋以来の三級制（「州・郡・県」）を二級制（「州・県」）に簡素化する。さらに、貴族勢力や地方長官が握ることが多かった地方官吏などの任命権や軍事権も中央に集中させ、門閥にとられない試験による官吏登用制度「科擧（貢擧）」を創設するなど、貴族政治を排して中央集権化を進める。

貨幣については、当時、軽重さまざまな悪銭が流通の主体となっていたが、文帝は帝位につく581（開皇元）年に新銭の鑄造を開始し、前漢期からの「五銖」銭によって銭貨統一を推し進めていく。文帝の「五銖」銭は、「北周」の高い鑄造技術を背景とし、銭銘は「五銖」であるが外郭の幅がかなり広く作られ、一見して従来の「五銖」銭とは異なる新銭であることがわかる。また、新銭の重量基準として、一貫（1000文）の重さを「四斤二両」と定め、この結果、残存する隋代の「五銖」銭は3g前後の重量となっている。

文帝は、新しい「五銖」銭の浸透策として、各地の関（関所）に基準銭として新銭を100枚単位で配布し、通行者が所持する銭貨が基準銭と同様でなければ没収させる。これを銅原料として新銭を鑄造することで、旧銭から新銭への切り替えを促進していく。また、悪銭のほか北周銭など旧銭の流通を禁ずる禁令も相次いで打ち出している。

「陳」平定により銅山のある旧南朝領域を配下に置くと、文帝は翌590（開皇10）年、その統治に当たせた次男・晋王楊広（二代煬帝）に揚州で5か所の鑄銭所造営を命じ、新しい「五銖」銭を鑄造させる。これ以外にも、各地の王（息子たち）に数多くの鑄銭所造営を命じたとされる。こうした悪銭・旧銭の取り締まり・没収と鑄銭所造営による新銭の供給を積極的に行うことで、後漢末以降において流通の主体となってきた悪銭や旧銭の回収が進むとともに、新銭が浸透していき、新たな「五銖」銭による流通銭貨の統一が大きく進展したとされる。

二代煬帝（在位604～618年）は、北は涿郡（現在の北京市）から黄河・長江を経て南の余杭（現在の杭州市）に至る大運河の建設や再三の高句麗遠征を行うが、徴用で困窮した農民が各地で反乱を起し、隋王朝はほどなく滅亡する。隋王朝末期の動乱時に、再び私鑄銭が出回り貨幣流通は混乱するが、文帝が築き上げた銭貨統一は、律令、官制などの諸制度とともに唐に継承されていく。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

【参考文献】

布目潮風・栗原益男、『隋唐帝国』、講談社学術文庫、1997年

山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年

山岡直人、「中国貨幣の歴史 14 南北朝時代の貨幣①－南朝の貨幣－」、『金融研究』第25巻第2号、2006年
——、「中国貨幣の歴史 15 南北朝時代の貨幣②－北朝（北魏・北斉・北周）の貨幣－」、『金融研究』第25巻第3号、2006年